



TITLE:

経営経済学と人間問題

AUTHOR(S):

市原, 季一

CITATION:

市原, 季一. 経営経済学と人間問題. 経済論叢 1967, 100(5): 422-439

ISSUE DATE:

1967-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/133230>

RIGHT:

經濟論叢

第100卷 第5号

山本安次郎教授記念號

献 辭	出口 勇 藏	
Supercargo (上乘, 貨物上乗人) について	佐 波 宣 平	1
經 営 哲 学	高 田 馨	15
経営経済学と人間問題	市 原 季 一	34
経営管理における過程理論の性格 (3)	降 旗 武 彦	52
経営経済と維持計慮	鈴 木 和 藏	71
経営財務論の動向とその基礎構造をめぐる一考察	加 藤 勝 康	90
経営の基本理念と日本的経営	山 城 章	110
バーナードのリーダーシップ再論	田 杉 競	131

山本安次郎 教授 略歴・著作目録

昭和42年11月

京都大學經濟學會

経営経済学と人間問題

市 原 季 一

I 序 論

「そこでは明らかにニックリッシュ派は経済学的ならぬ経営経済学と考えられている」¹⁾と。この言葉は、山本安次郎教授が拙著『西独経営経済学』に対する書評の中で述べられたものであるが、面白い表現である。この派の経営経済学を経済学でないとはいえない。それは一種の経済学であるが、一般の経済学よりも広く深い土台を持っていると解することができる。ニックリッシュ自身も次のように述べている。「経済の部屋の床板がはがされねばならない。そして、この方向にどこまで経済が達しているかを研究するために、深く降ろされねばならない」²⁾と。また、「経済学者は、経済生活の諸現象をその根底に達するまで追跡しなければ、それを理解することができないであろう。この研究をもっぱら哲学者や心理学者にゆだねるということは、ここでは経済学者を益しないのである。経済学者は自らそれを行なわねばならない。そして、自ら深奥にせまらねばならない」³⁾と。そして自らこのことを行なったのである。深く根底にまで達するとは、人間の問題の中に達することを意味し、人間の問題を土台に置き、その土台から経済をながめることを意味している。

anthropozentrisch (人間中心的)⁴⁾とは、かつてシェーンプルークがニックリッシュ経営経済学を特色づけるのに使用した表現である。戦後の西ドイツでは、物質中心主義が盛んであって、人間の問題はあまりかえりみられなかった。経

1) 山本安次郎「市原季一著・西独経営経済学」、『国民経済雑誌』第101巻第1号、96ページ。

2) Nicklisch, Heinrich: *Betriebswirtschaft*, Stuttgart 1929-32, S. 7.

3) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 19.

4) Schönplüg, Fritz: *Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre, eine dogmenkritische Untersuchung*, Stuttgart 1933, S. 206.

経営経済学の諸文献においても、労働する人間が単なる手段の位置に置かれている場合が多かった。しかし、最近では、後述する良心の振子の作用であろうか、やや反省の傾向もみられる。『人間中心の』経営経済学の問題」という表題をかかげたブートの論文などその一例である。ブートはニックリッシュについて、「ニックリッシュは研究対象の限定に際して、経済が本来どの深さまで人間の中に達するかという問題を提出し、このことを土台にしてすべての経済活動の出発点であり担い手である人間を彼の体系の中心点におくことにより、他の人びとと最初から明らかに異なる経営経済の理論を創り上げたのである」⁵⁾と。また、人間中心的ということについて、「経営経済学の理論は、それが経済を行なう者は人間であるという事実論に論及するだけでなく、この事実をその思考の脈絡の出発点と中心点にまで高める時に、『人間中心的』である」⁶⁾と。人間中心的の観点に対立させられているものは、人間を手段視する用具主義の方法 (instrumentalistische Betrachtungsweise) である。ブートによって、人間中心的という分類の下にニックリッシュ経営経済学の再検討が始められていることは注目を要することである。

本稿においても、ニックリッシュの人間中心的の視点を検討し、その現在における意義をさがしたいと思う。彼の主張は哲学的色彩を帯び難解である。彼の門下のレスレさえ、「むつかしいスタイル」⁷⁾と称し、「容易に読みえない」⁸⁾としている。日本語にすると一層むつかしくなる。しかし、そこには深さと体系があり、我国においても、彼の経営経済学と取り組まんとする学者があとをたない。ちなみに、戦後の西ドイツにおいてニックリッシュの名を有名にしたのは、彼の四男ハンスが父をモデルにした小説⁹⁾を書き、これが90万部も売れ、またババリア映画会社の手で映画化されたりしたことである。著書のむつかし

5) Buth, Wolfgang: „Das Problem einer anthropozentrischen Betriebswirtschaftslehre“, *Zeitschrift für Betriebswirtschaftslehre*, 36. Jahrg., 1966, S. 549.

6) Rössle, Karl: „Nicklisch und die normative Betriebswirtschaftslehre“, *ZHWHp., Festschrift zum 60. Geburtstag von Heinrich Nicklisch*, 29. Jahrg., 1936, S. 9.

7) Nicklisch, Hans: *Vater unserer bestes Stück, eine heitere Familiengeschichte*, Berlin 1955, 尾関文二郎・富士田英三訳『パパにはかなわない/ニックリッシュ』筑摩書房、昭和36年。

いスタイルと対照的なユーモラスな彼の家庭生活がえがかれている。

Ⅱ 基礎と作用の哲学

物質と人間に関して、ニックリッシュには二元論的な立場がみられる。

物質は人間の意識の内容の外にあり、それ自体統一体をなしている。原因 (Ursache), 作用 (Wirkungen), 基礎 (Gründe) という特殊な用語を使用して、ニックリッシュは自然現象を説明する。プートが、「ニックリッシュの基礎と作用の哲学」⁹⁾と称しているのがこれである。ニックリッシュは、「物質は力である」¹⁰⁾という。具体的に目にみえるもの、例えば木材とか岩石は、物質の本質に関するものではなく、その現象形態である。基礎といわれるものはこれである。その背後にある目にみえぬ力が物質であり、これが原因と称せられる。力は基礎を通して作用を行なう。基礎なくしては力は作用しない。力は、基礎が十分にととのうや作用を始める。例をあげれば、種子の萌芽という作用において、基礎は萌芽可能の土壌と種子である。原因である力は、基礎の背後にかくれてみえない。

物質が力であるのに対し、人間も力である。しかし、人間が物質と違うのは、人間が自己を意識している自発的な力であるということである。したがって、「人間は精神である」¹⁰⁾といわれる。自発的な自己の意識、すなわち直接的自己意識 (unmittelbares Selbstbewusstsein) が理性 (Vernunft) もしくは良心 (Gewissen) と称せられる。直接的自己意識、すなわち良心は、その他の意識を統制し、意識全体を統一体たらしめている。その他の意識とは、間接的自己意識 (mittelbares Selbstbewusstsein) と間接的意識 (mittelbares Bewusstsein) である。前者は、心理的・生理的装置たる肉体に由来するものであり、後者は精神と肉体の外部にある物の世界に由来するものである。

8) Buth, Wolfgang: a. a. O., S. 551.

9) Nicklisch, Heinrich: *Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung*, Stuttgart 1920, S. 3.

10) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 16.

ニックリッシュの自由に関する見解は、ブートもいう如く、「ドイツ理想主義の自由の概念、しかも特にイマヌエル・カントの自由概念に帰する」¹¹⁾ものである。ニックリッシュ自身も、「カントはなお常に正しい。自由とは、如何なる人間も単なる手段であってはならないということである」¹²⁾とのべている。更に、自由についていう、「自由とは、人間が良心に従って意欲し行動することをいう。かかる行動が、人間的にみて自由なのである。何故なら、我々の人間的な、すなわち精神的な存在が良心の中に基礎を置いているからである」¹³⁾と。また、「人間は人間たる行為のための欲求と動機を彼の良心の中において価値判断しうが故に、そして、この価値判断に従って行動する時その行動を彼の最も内面の本質から発する独自の行動と感ずるが故に、人間は自由である」¹⁴⁾と。

さて、物質の説明の際に登場した基礎についてであるが、基礎には二種がある。一は、人間の支配領域の外部で自然に構成される基礎であり、二は人間によって構成される基礎である。前者は自然基礎(Naturgründe)と称せられ、ここでは原因は自然作用(Naturwirkungen)を行なう。自然基礎の内部では、世界は物質のみである。後者は目的基礎(Zweckgründe)もしくは人工基礎(Kunstgründe)と称せられる。人間は自然法則の枠の中で目的基礎を構成する。ここでは、原因は、人間が目的として定めた作用、すなわち、目的作用(Zweckwirkungen)もしくは人工作用(Kunstwirkungen)を行なう。かくして、人間は欲求を充当する。例えば、野草の萌芽が自然作用であるならば、耕地における小麦の萌芽は目的作用である。人間は原因に人間の目的を指示する。そのために、人間は可能性のすべてを知らねばならない。自然科学の発展が、この認識の生長を示している。

シェーンブルークは、ニックリッシュの認識理論の三つの根底の第一のものとして、「自然科学的物質主義」¹⁴⁾をあげている。物質が人間から独立して存在

11) Buth, Wolfgang: a. a. O., S. 552.

12) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 45.

13) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 43.

14) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 193.

しており、自ら統一体を保っていると考えられているからである。シェーンブルークは次のようにいう。「ドイツ理想主義の古典的代表者は、理性に排他的な唯一の優越性を確保すべしという考え方で、自然と自由という大問題を解かんとこころみだ。……かかる見解は、すべては精神であり精神は絶対者であるという主張において周知の如く最高調に達するヘーゲル哲学の中に、最も徹底してあらわれる。……この点においてニックリッシュは理想主義のイデオロギーから離れるのである。そして、一つの独自の道を求めている。彼は、精神の世界とならべて、もう一つの世界を置いたのである。物質の世界がそれである」¹⁵⁾と。また、シェーンブルークは、十九世紀の中期および後期における自然科学の飛躍的發展によってよびおこされた物質主義の世界観の影響が、ニックリッシュにみられることを指摘している。「ニックリッシュは、このような哲学的な動きからの影響をまねがれることはできなかった。この『自然科学の時代』の子の一人として、彼は、近代的自然哲学の業績をみすごすことはできぬと信じている」¹⁶⁾と。

しかし、他方において、シェーンブルークは、ニックリッシュの三つの認識理論の根底の第二を、「ドイツ観念論哲学 (Philosophie des deutschen Idealismus)」¹⁷⁾であるとしている。物質に対立させて人間の自由を主張するからである。既述したように、自然基礎の世界は物質のみである。また目的基礎の世界においても、人間は自然法則そのものを変更することはできない。しかし、ここでは、人間は人間の目的に合わせて基礎を形成し、物質をして、人間の欲する作用をなさしめうるのである。かくして物質の力は意識的となり、人間は物質の支配者となる。このことは人間の自由を意味し、かくなりうるのは人間が精神であるということによる。シェーンブルークは次のように表現している。「哲学的物質主義は、その認識が一層高度の関連の中に整頓され、その重要性が奪われることなく、しかし、その一般的妥当性が制限されるということによ

15) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 197-98.

16) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 199.

17) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 193.

って、ニックリッシュの世界観の中に乗り越えられている。そのことによって、ニックリッシュは、精神の世界と物質の世界の間に一つの橋を作り上げたのである。そして、その支配的地位が結局一層高められた哲学的観念論との結びつきを再び作ることを、この橋が彼に可能ならしめるのである』¹⁸⁾と。

Ⅲ 共同体形成行動としての組織

ニックリッシュは、精神的存在たる人間の発展にとって特に重要なものとして、三つの人間欲求をあげ、「人間が組織行動を行ないうる能力は、この三つの欲求の強さにかかっている』¹⁹⁾という。したがって、組織の問題に入る前に、彼のいう三つの欲求をみておこう。

第一の欲求は、自己の精神的存在を維持したいという欲求である。自己の維持とは、通常は自己の肉体の維持の意味に用いられている。しかし、ニックリッシュによれば、肉体は人間ではない。肉体は人間が生活するための道具にすぎない。彼はいう、「肉体生活の維持と生ける人間の維持とは、我々にとっては異なる事柄である。前者は人間の生活のための道具の維持であり、後者が自己の維持である』²⁰⁾と。自己維持の欲求を充当する唯一の手段は、深く敬虔な心である。この中に精神的存在が集中し、強められる。ニックリッシュにおいては、貨幣をかせがんとする欲求は、「人間の現世の生活のための道具たる肉体の保全をめざすもの』¹⁹⁾として位置づけられている。すなわち、低次元のものともみられている。最近の管理研究の傾向をみるに、人間の経済的欲求を操縦して彼等を働かせることに対する限界が指摘され、高次の欲求に目をむけることが主張されているが、これは、ニックリッシュの立場に通ずるものを持っている。ニックリッシュはまたいう、「生活をあまりに物質に向ける人間は、自ら人間的に発展しない』¹⁹⁾と。「彼等は多くのことを技術的には器用に構成し指導するであろうが、彼等の仕事は大きくならず、常にその中に滅亡のぎざし

18) Schönpflug, Fritz: *a. a. O.*, S. 201.

19) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 36.

20) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 34.

を担うであろう」²¹⁾と。

第二の欲求は、人類の中に一体化せんとする欲求である。すなわち団結の欲求である。人間は個人を越えて共同体へ帰一することにより一体化する。人間は愛をほどこすことにより、かく一体化するのである。愛は共同体に生を与え、有機的なものの奥深い意義を示す。愛の源泉は、また良心の中にある。第三の欲求は、人類の中に秩序的に行動せんとする欲求である。人間は正義を守ることにより、この欲求を充当する。愛によって一体となるのに対し、正義によって肢体となるのである。正義によって、全体と肢体との依存関係が正しく秩序づけられ、共同体の生活が可能となるのである。

組織の問題へ進もう。ニックリッシュは自ら、「ここでは組織の概念は人間の行動状態 (*menschliches Tätigsein*) の意味にとられている」²²⁾という。Organisation (組織) という言葉は、その語源において Organismus (有機体) という言葉に関連している。組織が行動の状態であるという場合の行動の状態とは、人間の有機体形成活動の状態である。それが、組織と称せられるのである。ニックリッシュによれば、「組織するとは、有機的に行動している状態 (*organisch tätig sein*) をいう」²³⁾のである。静的な概念ではなく、動的な概念であるということができる。

伝統的なドイツの組織研究者は、このニックリッシュの言葉の中に組織の概念を見出さずにいる。例えば、リットシュティークは、「この定義は組織が何かということを述べていない」²⁴⁾というし、ノルトジークは、「ニックリッシュは彼の著書のどの個所にも把握しうる形で組織概念を定義していない」²⁵⁾という。ノルトジークは、ドイツを代表する組織研究者の一人である。彼によれば、「組織するとは、有効な組織のルールを企画し発動させること」²⁵⁾である。

21) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 1.

22) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 49.

23) Rittstieg, F.: „Organisation und Technik“, *Annalen der Betriebswirtschaft*, I. Bd., 1927, S. 523.

24) Nordsieck, Fritz: *Grundlagen der Organisationslehre*, Stuttgart 1934, S. 43.

25) Nordsieck, Fritz: *a. a. O.*, S. 16.

そして、「組織とは有効な組織の諸ルールの一つのシステム (ein System geltender organisatorischen Regelungen)」²⁶⁾である。そこに、組織技術者の立場がみられる。彼は、若干の前提を置いている。「第一に我々は、その給付が結び合わされねばならないところの力の源泉、すなわち労働の主体が組織者の欲するままに動くということを仮定しなければならない」²⁷⁾と。この仮定は、人間を単なる手段の地位に置くことを意味している。組織技術者が人間行動のルールのシステムとして組織を作り、組織の構成員は作られた組織の通りに動くという考え方は、ニックリッシュの組織観とは全く違った領域のものである。彼においては、組織の全構成員が組織者なのである。彼等が自発的に、有機的に結びつき合って、全体として有機体を形成している状態、これが組織と称せられているのである。組織においては、組織技術的なものの中に問題があるのではなく、組織構成員たる人間の有機的行動の側に問題があると考えられているのである。「有機的な人びと (die Organischen)」²⁸⁾という言葉を使用して彼はいう、「彼等は偉大な組織者である。春の草原に花が咲く如く、夏の太陽の下に小麦の海がみのりに波立つ如く、有機体が彼等のわたちの上に開花し成熟する組織者である」²⁹⁾と。さればこそ、組織するとは有機的に行動している状態をいうのである。

シェーンブルークは、ニックリッシュの認識理論の三つの根底の最後のものとして、「ローマン主義世界観 (romantische Weltanschauung)」³⁰⁾をあげている。そして次のようにいう。「ローマン主義の精神界を特長づけるために、二つの主要な標識を強調したい。ニックリッシュの世界観の中に同じ様式でそれが再び見出されるからである。その一は有機体の理念 (Idee des Organismus) であり、その二は普遍主義の理念 (Idee des Universalismus) である」³⁰⁾と。ところが、彼は、この二つを全体主義的に解釈しようとつとめるのである。「有機体

26) Nordsieck, Fritz: a. a. O., S. 15.

27) Nordsieck, Fritz: a. a. O., S. 47.

28) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 72.

29) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 193.

30) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 204.

の概念が適用される如何なる領域においても、人びとは全体主義観としてのこの概念に接するであろう」³¹⁾とか、「普遍主義は、その基本態度において個人主義の社会観に反対の方向をとる」³²⁾とかいっているのである。私は、ニックリッシュをローマン主義者に分類すること自体に問題があると思う。

シェーンブルクのいう三つの根底のうち、先に取り上げた自然科学的物質主義とドイツ観念論哲学は、一見矛盾はするが、ニックリッシュの二元論的立場を示すものとして使いうる。しかし、ローマン主義世界観は余分であろう。特に、新ローマン主義運動について、「経済学をみる限りでは、オトマー・シュパンがその指導者であり、ニックリッシュも個別経済学側の徹底した唯一の代表者としてそれに加えられねばならない」³³⁾という。なるほど、シュパンは全体主義者であろう。彼はカントを個人主義的であると攻撃している³⁴⁾。しかし、カントが個人主義者なれば、彼を常に正しいとして土台においたニックリッシュも個人主義者である。

ニックリッシュはいう、「部分としての人間のみを表現する目的、全体としての人間のみを表現する目的、この二つは、何れも人間の最も奥にある自己意識と矛盾する。両目的は、それぞれ人間の本質の一面を示し、他の面を除いているのである。両面が全体として人間の精神的本質であるのに」³⁴⁾と。人間は自己目的であると同時に手段、全体であると同時に部分である。人間は、かかる二重性においてとらえられている。複数の人間がこの状態にあるとき、それが有機体である。かかる有機体は共同体とも称せられる。彼はいう、「全体であり同時に部分であるということは、共同体を形成している個々人に与えられる共同体のしるしである」³⁴⁾と。このしるしのあるところに、我々は、組織における人間の疎外からの解放をみるべきであると思う。共同体における目的設定が重要な問題となる。それは良心に基礎を置くものである。「人間は良心の中

31) Schönpflug, Fritz: *a. a. O.*, S. 205.

32) Schönpflug, Fritz: *a. a. O.*, S. 206.

33) Spann, Othmar: *Gesellschaftslehre*, 2. Aufl., Leipzig 1923, S. 214-20.

34) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 67.

において、彼自身を、より大なる統一の肢体として、より大なる全体の部分として意識し、同時に、彼自身を、多様性の統一として、他の全体とならび存する全体として意識する³⁵⁾という。ニックリッシュは、共同体の中で、各個人が単なる手段にならない状態、手段であると同時に目的として扱われる状態に人間の自由を見出すのであるが、各個人が良心の中において目的を設定する場合に、かかる人間の自由が実現されると考えているのである。良心の中で価値判断することなく目的を設定すれば、精神的なものの入らない目的が設定される。すなわち、精神的存在たる人間に関係なき目的が設定される。彼はいう、「かかる目的設定に従属する者は自由でない³⁶⁾」と。そして、またいう、「他の人びとは自由である。彼等は、彼等の良心に従う目的を設定し、最も深き自己意識の中で自分のものと認める目的を設定しているからである³⁷⁾」と。彼が、「組織するとは、簡単にいえば、精神的存在として行動している状態 (als geistiges Wesen tätig sein) である³⁸⁾」とも定義するゆえんである。

ニックリッシュの次の言葉は重要である。「今日まで、人間の生活、人間の経済生活の発展、人類の偉大な全歴史は自由を求める振子であった³⁹⁾」と。自由を求めて闘争が繰り返され振子は前後左右に揺れるのであるが、振子の中には重心がある。この重心を、彼は良心であるとする。彼は独裁者を好まない。「権力の渴望者と盲従者によって、有機体は繰り返して不自然な危険状態においこまれた⁴⁰⁾」という。やがて良心の火山が爆発し、圧えつけられていた人びとが奪われていたものを取りかえすのである。自由はまた行き過ぎることがある。「しかし振子は、やがて良心の重心をもって静止点へ復帰することを始めるのである⁴¹⁾」という。重ねてのべている。「いつの時代にも権力の渴望者と盲従者は偉大なる組織者と称せられて出現した。しかし、彼等のしたことといえ、有機体を危険にさらしたことである。彼等の組織活動は精神を欠き良心を欠いている。人間の中にある良心の重心が結局においてもたらした清算の後に

35) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 49.

36) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 73.

37) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 74.

は、何の痕跡も残さなかったのである。彼等が如何に強力な権力をもって現われるとも、また弁舌をもって叫ぶとも、彼等は張子である」³⁷⁾と。彼は、人間の良心に信頼をおいている。何れは良心が力を発揮して問題が解決されると信じている。彼には、共同体と自由はユートピアではないのである。

IV 企業の技術過程と経済過程

基礎と作用については既に述べたが、企業の有する技術的機構もしくは物的機構は、ニックリッシュにおいては基礎の場 (Grundefelder) と考えられている。それは、如何に完全に構成されとも有機体ではないとされる。オルガニズムという語は、人間の側にのみ使用され、メカニズムという語に対立させられるからである。一人の人間が基礎の場を動かすと、それは個人の有機体の拡大となり補強となる。個人は自分の手足のエネルギーを自由に動かす如く、基礎の場の中に自然の原因を作用させるのである。複数の人間が基礎の場に立ち向うときには、個人の有機体の拡大強化ではなく、共同体の拡大強化となる。

企業の技術過程の発展には顕著なものがある。それと人間との対立、いわゆる技術過程の発展から生ずる人間疎外の問題は、多くの論者の取り上げるところである。ニックリッシュは、分業を論じて、この問題に触れている。技術過程の発展は人間の分業を促進する。しかるに、共同体の発展は遅れたままということがある。両者の発展の不均衡の下で多くの人びとが苦しむのである。分業とともに、共同体が発展させられねばならない。彼は次のようにのべている。「共同体を発展させることなく分業を促進する人びとは、基礎の場の中で働いている人間の精神的存在を認めず人間を技術的装置の構成部分として重視しているのである。彼等は、人間を人間の精神的諸関係から引き離し、基礎の一構成部分たらしめる。すなわち、人間を、予測された自然法則の諸関係の一部分たらしめ、自然法則の作用の束縛の下に置く。縛られて鷹におそわれて苦しむプロメテウスの姿が眼前にうかぶ」³⁸⁾と。技術過程の発展が招来する人間疎外

38) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 92.

の問題が示されている。

この解決策として世に提唱されているものは、細分された労働に従事している者に全体を見せ、細分労働なくしては全体が完成しないことを知らしめることである。これに対してニックリッシュはいう、「それは誤れる考え方である。人びとは欠陥の根がその中のみに見出されねばならない有機的なものを無視し、その中には欠陥の全くない技術的なものの中をさぐっているからである。すなわち、人間が精神的存在であるということを想起せず、また人間が精神的であるが故に細分された労働を共同体の中でのみ成就しようということを想起せずして、自然法則的諸関係の中に入りこんでいるからである」³⁹⁾と。解決策として、共同体の強化が指示される。「共同体と分業は同じ瞬間において生まれねばならない」⁴⁰⁾という彼の言葉は、このことを表現している。具体的には、構成員の決定への参加、すなわち共同決定 (Mitbestimmung) が提唱されている。「個々人が共同で設定した目的を共同で実現することにより、共同体が成立する」⁴⁰⁾からである。ここにも、ニックリッシュの二元論的な立場がみられる。技術的なものには手を加えず、精神的なもの側面で問題の解決が考えられているからである。分業の促進そのものは非難されておらず、共同体の発展のおくれが非難されているのである。

ドイツの経営社会学は技術過程に由来する人間疎外の問題をその中心テーマの一つとしてきた。この問題について、戦前派 (古典派経営社会学) は後むきの前途悲観論を主張していたのに対し、戦後派 (近代派経営社会学) は前むきの楽観論を展開しているとみることができる。詳細については、拙著『西独経営社会学』(増補版、昭和42年)を参照していただきたい。戦後派の代表者の一人であるポピッツが、戦前派のブリーフスなどの人間疎外論に対し、その基礎にヘーゲル的なドイツ観念論哲学があることを指摘している⁴¹⁾。ポピッツなどの見解には、物質主義があるように思われる。ニックリッシュの立場は二元論的で

39) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 92-93.

40) Nicklisch, Heinrich: *a. a. O.*, S. 89.

41) Popitz, Heinrich u. a.: *Technik und Industriearbeit*, Tübingen 1957, S. 7.

ある。「ニックリッシュは、世界は精神であるという観念論の基本公式を精神の観念の誇張であると感じ、また反面において、世界は物質であるという自然科学の公式を承認することができない」⁴²⁾のである。ニックリッシュの立場には、戦前の人間疎外論にあった技術に対する嫌悪の感がみられない。また彼は、疎外の問題に対してさほど悲観的ではない。ヨーロッパでは人間を機械視するものとして激しく排撃された米国のテイラー・システムに対しても、反対を表明しない。彼の二元論的態度がかくさせていると思うのである。人間は手段であるということは否定しえないのである。単なる手段としてだけでなく、同時に目的として扱うべしと説かれているのである。

他面において、ニックリッシュの立場は、戦後派経営社会学の疎外楽観論に対する警告を含んでいる。クネーベルなど、「高度に合理化された生産の段階では、技術による人間の疎外は、技術自身によって再び止揚される傾向にある」⁴³⁾という。ニックリッシュは、技術の側ではなしに人間の側に問題をみようとする。目的基礎の構成に際しては、人間はその目的を良心の中で評価しなければならない。かくしてこそ、目的作用は精神的なものとなり、人間は物質からの自由を確保するのである。シェーンブルークは次のように説明している。「良心の中に錨を下すことによって、目的領域全体が精神的となる。そして自然全体は、それが人間と関係を持つ限り、精神過程の中に包摂せられ、精神過程の一構成部分になる」⁴⁴⁾と。

以上に企業の技術過程をみた。次に企業の経済過程をみよう。

人間は目的基礎を構成して目的作用を手に入れる。この場合、経済原則と通常いわれるものに二つの考え方がある。一は、与えられたる基礎から最大可能の作用を手に入れることであり、二は、目的と定めた作用を最小可能の基礎の費消によって手に入れることである。ニックリッシュは、ここで、エネルギー

42) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 199.

43) Knebel, Hans-Joachim: *Handlungsorientierung im Industriebetrieb, eine Untersuchung über das Verhältnis von Technik und Betriebsideologie*, Tübingen 1963, S. 4.

44) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 203.

不変の自然法則を持ち出すのである。彼はいう、「最大可能の作用は、如何なる場合においても、基礎の中にあらかじめ作用として潜在していたものよりも大ではない」⁴⁵⁾と。また、「最小可能の基礎の投入は、完全効率の下で目的と定めた作用をもたらすために必要であったもの以上が費消されなかった時に実現される」⁴⁶⁾と。彼は、かかるエネルギー維持の自然法則が共同体維持の経済法則と結びつきうろと考えている。共同体において、維持の法則は、構成員の貢献に対する成果の正しい分配を命ずる。この法則は、全であると同時に個、自己目的であると同時に手段という状態の実現を命じているのであるが、それはまた、貢献したエネルギーに応じて目的作用を分配すべしというエネルギー維持の自然法則でもある。

ニックリッシュの資本主義経済観をみておこう。資本主義経済機構は、それを人間に対立する物質の世界とみてもよいであろう。ここにも、企業の資本主義的経済過程が人間疎外を招来する。そして、資本主義経済に対する悲観的見解が一般化する。ニックリッシュ自身も次のようにいう。「現行の法律によれば、利潤に対する請求権は企業者資本と結びついており、企業における精神的・肉体的労働と結びついていない。このような誤りの下においては、経済する人間は苦しみ続け、法律上においても現実においても、ついには葬りされるであろう」⁴⁷⁾と。資本主義経済がもたらす人間疎外を表現していると考えられる。しかし、彼は、資本主義の枠の中で問題が解決できると信じている。シェーンブルークが、「ニックリッシュ体系は資本主義から生まれたものではない。しかし、資本主義に反して生まれたものでもない」⁴⁸⁾というゆえんである。ニックリッシュはいう、「資本主義といわれるものは、資本によってではなく、不公平によって発生したにすぎない」⁴⁹⁾と。「私の見解は、資本に対する私的所々に反対するものではない。参加者に対する全体の成果の不公平な配分に反対

45) Nicklisch, Heinrich: a. a. O., S. 95.

46) Nicklisch, Heinrich: *Wirtschaftliche Betriebslehre*, Stuttgart 1922, S. 67.

47) Schönplüg, Fritz: a. a. O., S. 218.

48) Nicklisch, Heinrich: *Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung*, Stuttgart 1920, S. 101.

するものである」⁴⁹⁾と。

彼は、分配の面に問題の解決をみている。所得の分配の民主化が必要なのである。ここでも、良心の中に錨が下されていなければならない。この錨がはずされると、そこから物質の世界が始まり、人間は物質の下に置かれてしまう。この点についても、物質と人間に関する彼の二元論を想起すべきである。目的基礎の領域では、人間は自然法則の枠の中で人間的作用を行ないえたのである。ニックリッシュにおいては、資本主義経済の物質的性格は否定されていない。また、それに立ち向う人間の自由も否定されていない。ブートの表現を引用しよう。「全体としての経済は、経済固有の法則に従う現実の構成体であって、人間は助けるものもなくそれに引き渡されてしまうのか。あるいは、経済は、それを担う人間によって意識的に有意義に形成されうるのか。この問題は、ニックリッシュにおいては、経済は自然的・因果的メカニズムか、精神によって操作されるオルガニズムかという形で極端に対立させられる。彼は、この対立を後者の可能性に有利な方法で解決している」⁴⁹⁾と。

ニックリッシュ経営経済学の体系も、資本と労働という二階級モデルを土台にしている。資本の私的所有権は、反対されるところか擁護されている。その止揚は、「節約者の上位に浪費者を置くことになり、勤勉な者の上位に怠け者を置くことになり、賢者の上位に愚者を置くことになる」⁴⁹⁾とさえいう。資本の否定よりも、労働の地位を高めることに目を向けるのである。「資本ではなくして、労働の精神が企業の魂である」⁵⁰⁾という。資本中心の経済計慮である収益性に代えて彼が提唱する経済性の計慮は、資本と労働との同権を前提として組み立てられている。彼のいう経済性は、企業の経済過程に共同体の法則が支配していることを意味する。労働と資本との共同体としての企業が産出した成果（労資の取り分となる所得の合計）に、企業の成員がその貢献に応じて参加することを意味している。企業の経済過程は、成果産出過程と成果分配過程

49) Buth, Wolfgang: *a. a. O.*, S. 551.

50) Nicklisch, Heinrich: *Wirtschaftliche Betriebslehre*, Stuttgart 1922, S. 56.

に分けて考察され、経済性は、前者に対しては最大の成果の産出を命じ、後者に対しては貢献に応ずる成果の分配を命ずる。ここでも、彼は資本の権利を認めている。「経済性の結果は、企業全体を保全し、そのことにより全体の収益性をまたまめるのである」⁵¹⁾と。彼は、資本の権利をみとめつつ、労働が資本の単なる手段として扱われることを是正したいと願っている。労働の手段的性質を否定せず、それが手段であると同時に自己目的として扱われるべきことを主張しているのである。経済性は、労働側の取り分を企業の目的たる成果の中に包摂し、成果の労資同権的分配を考えるということにより、共同体の要請に応じているということが出来る。ニックリッシュは、ここでも、良心が振子の重心のように作用し、労資間の激しい対立をいずれは静めると考えている。この考え方は、現在の西ドイツの共同決定法などにみられる企業における労資同権的共同決定の方式の思想的土台を提供しうるものである。詳細については、拙著『ドイツ経営政策』（4版、昭和40年）を参照していただきたい。

V 結 論

ニックリッシュの立場は、多くの人びとによって規範論を代表するものとして位置づけられ、経験論の立場と対立させられている。ヴェーエなど、「ニックリッシュは経営倫理学者 (Betriebsethiker) なり」⁵²⁾という。しかし、私はニックリッシュの主張の中に、ドイツ語の *anthropozentrisch* という語によって特色づけられる人間中心の立場をみたいのである。この表現に対立させて使用されているのは、*instrumentalistisch* という語である。用具主義的と訳しうる。人間を手段視する立場である。戦後の物質主義的風潮の下で、この方向へ走った人びとも多い。彼等はニックリッシュを盛んに攻撃するのである。しかし、経営経済学を規範論と経験論に分けて対立させるのもよいが、人間中心的か人間手段視的かという対立点も一層重要であると思うのである。ニックリッ

51) Nicklisch, Heinrich: *Die Betriebswirtschaft*, Stuttgart 1929-32, S. 144.

52) Wöhe, Günter: *Methodologische Grundprobleme der Betriebswirtschaftslehre*, Meisenheim am Glan 1959, S. 122.

シュを人間中心的立場の代表者、先駆者として位置づけうる。そして、人間機械視モデルに反論を示しつつある新しい経営諸学の動向を、また人間中心的と称しうる。

もっともニックリッシュは、ドイツ観念論哲学を大いに利用して、先験論的に主張を展開している。しかし、このことをもって、彼が経験的現実を無視してユートピアをえがいているという解釈には取りえざるものがある。ニックリッシュの考え方の土台には、振子は如何にゆれるとも、結局は人間の本性にふさわしい位置に静止するという確信がみられる。問題として残るのは、人間の本质が先験的に規定されていることである。ゾムバルトの表現を借りれば、「巧妙に築かれ、強固にコンクリートで堅められたカントの要塞」⁵³⁾の中に立っていることである。彼を信奉するシェーンブルークさえ、「ニックリッシュは、現実の前提なき分析によって初めて獲得される対象の本質構造を、その基本型においてア・プリオリに決定したことにより、行き過ぎを犯している」⁵⁴⁾という。しかし、観念論哲学を土台とする彼の先験論は、人間中心モデルの仮説の提出と考えてみてはどうであろうか。そして、この仮説の証明を後の人に託しているともみたいのである。人間の経済的欲求を低次の欲求とみる傾向、組織目的と個人目的との調和を考えるべしとする一連の傾向、これらが最近米国や西ドイツで盛んにみられるが、これらをニックリッシュの先験論の実証的裏付けとして位置づけようと思うのである。

ニックリッシュは、経営経済学の研究者として生涯を貫いている。経済の土台をさぐりつつ人間の問題に入りこんで行ったと思われる。そして、彼は、かくしてとらえた土台から、すなわち人間的立場から経済問題を見ているのである。それだけではない。同じ立場から組織の問題を見、技術の問題を見ているのである。彼は、彼の人間研究について、次のようにのべている。「経営学的諸研究 (betriebswissenschaftliche Arbeiten) を行なうことが、この研究の誘因

53) Sombart, Werner: *Die drei Nationalökonomien*, München/Leipzig 1930, S. 74.

54) Schönpflug, Fritz: *a. a. O.*, S. 223.

である。私は、その上に立って研究ができる土台をさがしたのである」⁵⁵⁾と。特に、経営経済学の研究といわずに、経営学的諸研究と称している。正確には、経営諸学の研究とも訳すべきであろう。彼の土台は、彼の経営経済学の研究のためだけのものとしては惜しいものがある。その他の経営諸学、すなわち経営社会学、経営心理学、経営工学等々も、この土台の上に立ちうると思うのである。共通の土台の上に立つことによって、経営諸学間の協力が可能となる。ニクリッシュは、経営経済学以外の経営諸学にまで目を向けずにとどまっているが、今日、彼の立場を生かす道は、彼の土台の上に立って、経営諸学の協力を考えることにあると思うのである。

55) Nicklisch, Heinrich: *Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung*, Stuttgart 1920, S. VII.